



Title	関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相
Author(s)	高木, 千恵
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45718
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	高 木 千 恵
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 9 1 3 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 17 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相
論 文 審 査 委 員	(主査) 助教授 渋谷 勝己 (副査) 教 授 真田 信治 教 授 工藤真由美

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、関西若年層の話しことばを対象に、そこで起こっている言語変化の諸相を明らかにし、標準語と方言との接触によって生じる変化のメカニズムを追究したものである。導入部分としての第 1 部と、6 つの言語項目を取り上げて関西若年層の話しことばの実態を個別に分析し、また言語変化のメカニズムを総合的に考察した第 2 部の、2 部よりなる。

第 1 部「地域社会の言語変化」は 3 章から構成されている。第 1 章ではまず、研究者間で安定しない「方言」「共通語」「標準語」といった用語の意味するところを検討し、これらの用語に本論文での定義を与えている。続く第 2 章では、先行研究を概観しつつ、言語接触に伴う言語変化について分析すべき問題のありかを整理し、本論文の意義および目的を確認している。また第 3 章では、この目的に対応してデザインされた調査の概要をまとめている。本論文の以下の分析は、関西出身/在住の親しい友人 2 人 1 組による談話 35 組分、合計約 18 時間の文字化資料に基づいている。

第 2 部「関西若年層の話しことばの実態」は本論であり、8 章よりなる。

まず第 4 章では、インフォーマントがどの程度関西に根づいているかを見る「地域度指数（＝生え抜き度）」といった指標を用いて関西若年層の言語的背景の多様性を数値化し、それと、自らのことばにたいする意識との関連を考察している。ここでは、インフォーマントは地域度指数にかかわらず自らのことばを「関西の方言」と認識していること、生え抜き度の低い話者ほど地元のことばにアイデンティティを求める傾向にあることなどを指摘している。

続く第 5 章から第 8 章は、関西若年層の話しことばの形式面を取り上げて、その実態を記述した章である。まず第 5 章では、関西若年層に用いられる否定辞の 3 つのバリエーションを対象に、方言形・混交形・標準語形の併存状況を分析し、構文や活用によって使い分けられている様相を記述している。第 6 章では、関西若年層に多用されている標準語形～ジャナイ（カ）の実態を分析し、～ジャナイの導入によって方言体系における形式と意味用法の対応の透明性が高くなっていることを明らかにしている。また第 7 章では、ワ行五段動詞ウ音便形と形容詞の音便形を取り上げて分析し、方言の活用体系が標準語のものへと移行しつつあること、また活用における方言形の衰退は標準語と方言とで形態変化のルールを共通のものにしようとする動きであり、方言特有の規則を排除することで方言と標準語の対応を単純にする/同一にするというメカニズムがはたらいっていることなどを指摘している。第 8 章は、関西若年層が「東京のことば」という印象をもっている間投助詞サーを取り上げてその使用の実態を分析したところであり、関西若年

層はターンを確保しようとする場所でサーを用い、方言間投助詞ナーと異なる機能をもつこと、東京語形サーが受容されたのは、それが上昇下降調と共起するために、関西方言にすでに存在した無助詞の場合の「尻上がりイントネーション」と融合することができたことが一因だと考えられることなどを議論している。

第9章と第10章は、関西方言を特徴づけるのにはたすアクセントのはたらきの重要性を指摘したところである。第9章では方作文節量の算出という方法を用いてデータを分析し、形式面から判断される方言らしさにくらべてアクセントから判断される方言らしさが格段に多いこと、また第10章では、関西の若年層は京阪式アクセントを強固に保持していることなどを指摘している。

第11章は第2部のまとめである。関西若年層の話しことばは伝統方言体系とも標準語体系とも異なっており、それは標準語と方言の接触によって生まれた接触方言であること、その変化は、標準語との接触によって方言体系内部のあるいは標準語と方言の間の不規則性や不合理性が意識され、整合性を求めて進むものであること、などを結論として述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「接触方言の形成」という言語変化を、共通語化とはまた異なった言語変化の一類型として提示し、標準語と方言の接触による言語変化を研究するのに新たな視点を提供することを目指したものである。接触方言の形成といったアイディアについては、これまでに新方言やネオ方言といった概念が提唱されてきたが、ひとつの方言を取り上げて、そのなかで起こっている変化を多くのデータによって複数の言語項目にわたって一貫した視点から詳細に分析するという試みは、本論文が最初である。

また、第5章から第10章の、否定辞や標準語の「～ではない(か)」相当形式、音便形、間投助詞、方作文節、アクセントを個別に分析した部分には、方言形・東京語形・標準語形・混交形などの現れる制約条件を詳細に分析することによって得られた新たな知見、たとえば、間投助詞のサーはターンを確保しようとする機能をもつといった指摘なども、数多く盛り込まれている。また、関西若年層のことば体系が形成されるにいたった要因についての議論もあり、単純な記述とは一線を画している。地域度指数は使用言語形式と相関しないといった第4章の発見も重要である。

一方、本論文に問題点がないわけではない。本論文は研究者の視点で接触方言の形成過程を論じているが、話者の意識のなかではこの接触方言はどのように捉えられているのか、より詳細な検討が必要である。また、標準語との接触によって方言体系内部のあるいは標準語と方言の間の不規則性や不合理性が意識され、整合性を求めて変化が進むとあるが、本論文で指摘された言語の変化には、一方で整合性を生み出すものであっても別の面では不透明さ・複雑さをもたらすものもあり、両面的な分析が欠けているところがある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、関西若年層の接触方言の実態とその形成過程を詳細に追究した本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。